

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2006～2008

課題番号：18251006

研究課題名(和文) アフリカ・イスラーム圏における白色系民族と黒色系民族の紛争と共存の宗教人類学研究

研究課題名(英文) Religious Anthropological Studies on the Conflicts and the Integrations between different ethnic groups especially between 'Black' and 'White' ones in Islamic Africa

研究代表者

嶋田 義仁 (SHIMADA, Yoshihito)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 20170954

研究成果の概要：

イスラーム圏アフリカにおける白色系民族と黒色系民族の紛争と共存のメカニズムを総合的に地域比較するなかで、宗教と民族の関係を宗教人類学的に考察することが本研究の全体構想であった。本研究期間中に総計41回の海外調査を24カ国において実施した。また、4回の国際ワークショップを開催して国際的な研究者ネットワークの構築を図るとともに、4巻の『イスラーム圏アフリカ論集』を発刊して西アフリカ、東アフリカ、北アフリカそれぞれのイスラーム圏を総合的に比較研究した。イスラーム圏アフリカにおける白色系民族と黒色系民族の紛争と共存のメカニズムの宗教人類学的論考をまとめた『イスラーム圏アフリカ論集V』を、電子ジャーナルとして現在編集中である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	13,800,000	4,140,000	17,940,000
2007年度	11,800,000	3,540,000	15,340,000
2008年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
総計	33,300,000	9,990,000	43,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：イスラーム圏アフリカ、紛争、共存、スワヒリ、黒色系民族、白色系民族、
宗教人類学、ダルフル

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、マリ、カメルーンを中心に、サハラ砂漠南縁のサーヘル地帯におけるイスラーム文化の形成を、この地域の超部族的な都市・国家形成に注目しながら研究してきた(嶋田義仁1995『牧畜イスラーム国家の人類学』世界思想社、嶋田義仁・松田素二・和崎春日編2001『アフリカの都市的世界』

世界思想社)。その最大の原動力はサハラを媒介にしてのマグレブ・中東世界との交流であった。他方でサーヘルは貧困と砂漠化、それに民族紛争に苦しんでいた。しかしその三問題は関連しあっており、最大の問題は、かつて交流の舞台であったサハラがサハラ中央にひかれた国境紛争をもとに民族紛争の舞台となり、南北の交流が困難になってしまったこと

にある。それ故に貧困が生じ(多くの交易都市が疲弊した),また旱魃があっても,それを地域間交流によってカバーする危機管理能力も失われた。こうしたことが,サハラ中央部の民族紛争に拍車をかけ,マリやニジェールは国が二分する危機にも襲われた。

過激なイスラーム主義の運動も始まりだした(2001 嶋田義仁,「西アフリカにおけるイスラーム問題」『外交フォーラム』No. 155, 43-49 頁)。代表者はこうしたサーヘル地域の貧困,民族紛争,砂漠化のトライアングルを分析するとともに(2001 嶋田義仁,「砂漠化と民族紛争の背後にあるもの:マリ国の場合」『現代アフリカの民族係』和田正平編著,明石書店),サーヘル地域の問題解決にはサハラを媒体とした地域間交流の再活性化の必要を訴え続けた(2003 嶋田義仁,「砂漠と文明:『砂漠化』問題に即して」『地球環境問題の人類学』池谷和信編,172-201 頁,世界思想社)。

そんなおり,リビアのカダフィがサハラ共和国構想を発表,サハラに道路やパイプラインを建設して,サハラを再び活性化しようと訴えた。南の黒アフリカ諸国がどう反応するかと見守っているうちに,AUが形成された(2002)。しかし,そののちまもなくダルフール紛争が始まり,アラブ系住民が同じイスラーム教徒の黒色系住民の大量虐殺をはかっているという研究代表者には信じられない紛争が勃発した。ダルフール紛争についての学術的に正確な研究はまだ出ていないが,2005年にドイツのハレで行われたドイツ人類学大会では,紛争双方の当事者代表も含めて,現地を熟知した研究者6名の共同セッションが行われた。研究代表者もこれに参加した。これには,他地域における白色系と黒色系住民の間の紛争の研究者も参加していて,ダルフール問題を,ダルフール問題だけ孤立させずに(そうすると,白色系と黒色系住民の宿命的対立論に陥る),アフリカ・イスラーム圏全体における白色系と黒色系住民の間の関係の問題の一貫として理解する必要を研究代表者は議論のなかで痛感するに至った。

2. 研究の目的

こうした事態をふまえ,アフリカ・イスラーム圏に

おける白色系民族と黒色系民族の紛争と共存のメカニズムを総合的に地域比較し,宗教と民族の関係を宗教人類学的に考察する。

アフリカは従来北部の白アフリカと中南部の黒アフリカにわけて論じられてきた。歴史的事実としても北部アフリカと中南部アフリカとは,その間に横たわる世界最大の砂漠サハラ砂漠とエチオピア高原,インド洋にはばまれて,長い間歴史的交流がほとんどなかった。しかし,7世紀におけるイスラームの成立,アフリカへの伝播とともに,白色系民族と黒色系民族の交流は活発化した。この交流の媒体となったのは,サハラ横断の長距離交易とインド洋を経て東アフリカにいたる海洋交易である。これらの交易活動を通じて白アフリカと黒アフリカの接触面には,それぞれ,高度の文明が形成された。サハラの南のサーベル地帯には,10世紀ごろから様々なイスラーム都市・国家が形成された。ガーナ帝国,マリ帝国,ソンガイ帝国,ボルヌ帝国,トンブクトゥやジェンネなどの交易都市である。

東アフリカ・スワヒリ海岸にも様々な都市国家が建設され,14世紀世界周遊の後キルワ島を訪れたイヴン・バトゥータはキルワを世界で最も美しい町と呼ぶほどであった。このような黒アフリカ世界のイスラーム化は,武力ではなく,交易,イスラーム学者・聖者の来訪,という平和的手段によってなされたものであった。

しかしアフリカ諸国独立後,白アフリカと黒アフリカの接触ゾーンは突如として紛争地帯と化した。西サハラ問題,セネガル・モーリタニア紛争,サハラ中央のトゥアレグ問題,チャド問題,東アフリカザンジバルのアラブ・ペルシャ系王権の崩壊,そして民族浄化さえ疑われる現在のスーダンのダルフール紛争。このことは,7世紀以来1000年以上に渡ってアフリカで積み重ねられてきた,白色系民族と黒色系民族間の「人種的」ともいえる民族の隙をのりこえて交流しようとしてきた運動の危機を意味すると同時に,宗教間紛争が紛争の主要原因と考えられがちな現代において,同一宗教文化圏においても,しかもイスラームという一枚岩的にみられやすい宗教文化圏のなかでも激しい民族紛争が生じうること

を意味する。それがどうして生じるのか、またどのようにして終結に向かうのかあきらかにしようというのが、本研究の基本的な問題意識である。

この紛争を白色系民族と黒色系民族の宿命の争いのように理解する仕方もあるが、これらの紛争の多くが解決に至っているという事実は忘れてならない。西部サハラ地域の紛争、チャドの紛争、マリの特アアレグ問題がその例である。そもそも、AUが成立したばかりである。AU成立は、北アフリカ諸国の黒アフリカとの一体感の表明でもある。そのAUが現在、自らの責任においてダルフル問題の解決に取り組んでいる。その力量は疑問視もされているが、白色系民族と黒色系民族という大きな民族的差異をのりこえて交流してきたアフリカの歴史に蓄積されてきた知恵は無視できない。紛争の大きな原因は、人種対立に由来するというよりは、植民地化によってすすめられたアフリカの国民国家体制と近代化プロセスのゆがみにあるのではないかという想定を本研究はむしろ有している。さらにまた、この30年以上アフリカを襲っている旱魃という激しい気候変動(砂漠化)もその要因として無視できない。こうした問題意識にたって、イスラームを媒介とするアフリカにおける白色系民族と黒色系民族の交流の実態を、紛争と共存を含めて明らかにしたいという背景と全体構想を本研究はもつ。

3. 研究の方法

アフリカ・イスラーム圏内様々な地域において生じた白色系民族(アラブ、ベルベル、ペルシャ)と黒色系民族間の紛争のメカニズムと紛争解決・共存のメカニズムを、それぞれにおいてイスラームがどのような役割を果たしたのかに注目しつつ地域比較する。具体的には、セネガル、モーリタニア、マリ、ニジェール、チャド、スーダン、ケニア、タンザニアという白色系民族と黒色系民族間の紛争が発生してきた地域に研究者を派遣し、広域な地域比較を試みる。特に以下の3つを共通の研究課題とする。

①地域により多様な白色系民族と黒色系民族間の接触交流の様態の類型的整理。

②植民地化と共に始まる近現代史、あるいは旱魃な

どの気候変動が接触交流の様態にもたらした変容の類型的整理(たとえば、モーリタニアとスーダンでは白色系民族が国家の主権を握り、イスラーム教国化を果たしたが、他の国では黒色系民族が主導権を握り、イスラームの国教化もおこなっていない)。

③紛争の背景のこうした類型化をふまえての、紛争全体の類型的整理。

4. 研究成果

広域な地域比較研究のために、本研究期間中に総計41回の海外調査を24カ国(西アフリカ:カメルーン、チャド、マリ、ギニア、セネガル、モーリタニア、ブルキナファソ。東アフリカ:ケニア、タンザニア、モザンビーク、ジンバブウェ、スーダン。北アフリカ:チュニジア、アルジェリア、モロッコ、エジプト。その他欧州、中東など)において実施した。うち分担者の調査が21回、協力者の調査が20回であった。大学院生を含む若手研究者が積極的に現地調査に参加したことより若手研究者の育成もなされた。また、本科研主催の4回の国際ワークショップ(名古屋×2、カメルーン×2)や、嶋田、縄田、鷹木らの国際学会での研究発表により、議論の深化、かつ国際的な研究者ネットワークの整備もなされた。研究成果は、学術論文や学会発表で国内外に公表されるとともに、『イスラーム圏アフリカ論集』4巻の論集(I. 日野舜也『スワヒリ社会研究』、II. Djingui Mahmoudou *Le Pouvoir, Le Savoir et la Richesse*, III. 嶋田義仁『レイ・プーバ王国の研究』、IV. 『イスラーム圏アフリカ論集IV』)により、これまで日本人・アフリカ人研究者によってなされたイスラーム圏アフリカ研究を整備し、イスラーム圏アフリカにおける白色系民族と黒色系民族の紛争と共存のメカニズムについて宗教人類学的に解明した。現在その最終報告書をイスラーム圏アフリカ論集V』として編集中である。これは、電子ジャーナルとしてインターネットを通じて公開される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計39件)

嶋田義仁 2006 ヨーロッパに共同体は存在したか:地球人類共同体の哲学のために、『アルケー』pp. 16-31.

嶋田義仁 2006 「神の国」から「地の国」へ:ヨーロッパにおける主権国家思想の成立と中世世界『比較法制史研究:思想・制度・社会』pp. 284-314.

嶋田義仁 2006 「地域システムとしてのアフリカ伝統王国:アフリカの歴史生態構造と伝統国家」『アフリカ伝統王国研究Ⅲ』pp. 17-42.

嶋田義仁 2006 “Les royaumes africains comme systèmes régionaux -Zones écologiques et formations étatiques en Afrique” 『アフリカ伝統王国研究Ⅲ』pp. 43-57.

嶋田義仁 2007 「多様な王国の歴史と動態」『朝倉世界地理講座アフリカ I』pp. 88-105.

嶋田義仁 2007 「経済発展の歴史自然環境分析:アフリカと東南アジア比較試論」『アフリカ研究』70: pp. 77-90.

嶋田義仁 2008 「うたといのり:西アフリカから考える」『万葉古代学研究所年報』6: pp. 253-262.

嶋田義仁 2008 「ボロロ (フルベ) 西アフリカ最後の遊牧民」『サハラ以南アフリカ』講座世界の先住民 pp. 362-380.

嶋田義仁 2008 「社会的朔点香」『干旱区生香保育埼可持鉄友展』pp. 51-60

嶋田義仁 2008 「東地中海世界とアフリカ:チュニジア, ギリシャ, イスタンブール調査行」『イスラーム圏アフリカ論集Ⅳ』pp. 1-35.

嶋田義仁 2008 「伝統的知識と技術の再活性化によるアフリカの草の根開発 (Grass Root Development) と環境保護」の思想と方法『伝統知識の再活性化によるアフリカ草の根開発(Grass Root Development) と環境保護』pp. 1-96.

砂野幸稔 2007 「企図/プロジェクトとしてのアフリカ文学」『言語社会』pp. 59-72.

砂野幸稔 2007 「西欧近代の<時間>と<アフリカ文学>の時間」『フランス文学における時間意識の変化』pp. 79-92.

鷹木恵子 2006 アルジェリア・ムスタガネムの町とアラウィー教団のシャイフたち『アジア遊学』68: pp. 140-154.

鷹木恵子 2006 「マグリブ諸国における開発 NGO と国家」『東外大 AA 通信』pp. 57-58.

TAKAKI, Keiko 2006 “Women’s Income-Generating Work at Home and the New Media: A Tunisian Case” *The Journal of Sophia Asian Studies*. 24: pp. 117-128.

鷹木恵子 2007 「イスラームの女性とチュニジア:アラブ女性解放のリーダー国の動態」『朝倉世界地理講座アフリカ I』pp. 269-285.

鷹木恵子 2007 「マイクロクレジット融資と女性のエンパワーメント」『モロッコを知るための65章』pp. 287-291.

鷹木恵子 2007 「NGOの活動と地域開発」『モロッコを知るための65章』pp. 292-295.

鷹木恵子 2008 「チュニジア・オアシス農村の暮らしとその変容」『マグリブへの招待:北アフリカの社会と文化』pp. 163-176.

鷹木恵子 2008 「北アフリカのイスラーム聖者信仰:チュニジア・セダダ村の歴史民族誌」『宗教学文献事典』214p.

TAKAKI, Keiko 2008 “Women’s Income-Generating Work and the Public/Private Sphere: A Tunisian Rural Case” *Crossing Boundaries: Gender, the Public, and the Private in Contemporary Muslim Societies*. pp. 23-47.

今村薫 2006 「シェアリング・システムの全体像:カラハリ狩猟採集民の事例から」『アフリカ研究』69: pp. 113-120.

今村薫 2007 「クリスチャン・スピリティスト・コミュニティに集う人々」『ともに生きる』pp. 29-34.

今村薫 2007 「ヴァン・デル・ポスト」『狩猟民の心』『宗教学文献事典』p. 50

IMAMURA, Kaoru 2008 “The traditional house of Tuareg, adapted the harsh dry environment in the Sahara” *Journal of Nagoya Gakuin University, Linguistic and Cultural Sciences*. pp. 89-93.

菊地滋夫 2007 「ナイロビで結ばれた世界への思い:世界社会フォーラム 2007 を訪ねて」『電通報』p. 8.

菊地滋夫 2007 「妖術表象と近代国家の構図:妖術というキアスム」『呪術化するモダニティ:現代アフリ

カの宗教的実践から』 pp. 203-224.

縄田浩志 2006 「乾燥熱帯沿岸域の食生活：スーダン東部ベジャ族の事例から」『沙漠研究』16(1)： pp. 1-18.

NAWATA, Hiroshi 2006 "Human-camel Relationships in Coral Reef and Mangrove Ecosystems" *Proceedings of the 10th International Coral Reef Symposium, Okinawa*. pp. 1194-1203.

縄田浩志 2007 「ラクダ・レースのジョッキーたち—スーダンからの出稼ぎ民のネットワーク—」『サウジアラビアを知るための65章』 pp. 153-157.

縄田浩志 2007 「スーダンの飢餓・内戦へのまなざし」『朝倉世界地理講座：大地と人間の物語，第11巻アフリカ I』 pp. 333-349, 350.

縄田浩志 2008 「シルック王クウォンゴとの対話：われわれの手で平和をもたらしましょう」『アフリカの人間開発：実践と文化人類学』 pp. 259-311.

縄田浩志 2008 「『アフリカの人間開発』に関連する読書案内」『アフリカの人間開発：実践と文化人類学』 pp. 313-348.

縄田浩志 2008 「少女の瞳と少年のおちんちん：異文化ショックから文化人類学へ」『はじまりとしてのフィールドワーク』 pp. 26-48.

縄田浩志 2008 「ベジャ：ヒトコブラクダを介した紅海沿岸域への適応」『講座ファースト・ピープルズ第5巻サハラ以南アフリカ』 pp. 183-208.

縄田浩志 2008 「外国人労働者との共同作業による環境保全：サウディ・アラビア西南部レイダ自然保護区における放牧をめぐる」『村落開発と環境保全：住民の目線で考える』 pp. 99-114.

NAWATA, Hiroshi 2008 "Relationships between Humans and One-humped Camels in the Coastal Zones of the Arid Tropics" *A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems*. pp. 28-31+同頁数のアラビア語版

NAWATA, Hiroshi 2008 "Coastal Resource Use by Camel Pastoralists" *A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems*. pp.

32-52+同頁数のアラビア語版

〔学会発表〕(計15件)

嶋田義仁 「乾燥地からみた人類文明」『第41回日本文化人類学会学術大会シンポジウム：21世紀地球人類の危機と人類史』2007年6月3日，名古屋大学
SHIMADA, Yoshihito "Mobilization of Religions as Grass Root Development" *The 16 August at Stockholm Water, Ethics and Religion Seminar*. 2007年8月16日，ストックホルム

嶋田義仁 「乾燥地からみた人類文明：サハラ砂漠から考える」『乾燥地科学と砂漠化対処に関する国際会議』2007年8月25-28日，鳥取シンポジウム

嶋田義仁 「乾燥地からみた人類文明の危機」『自然環境と民俗地理学中日国際シンポジウム』2007年10月27、28日，北京師範大学

嶋田義仁 "Ethnic Relations in Sahel and Swahili" *The Comparative Studies of Ethnic Relations in Swahili and Sahel*. 2008年2月8日，名古屋大学

嶋田義仁 「アフリカ国家形成と乾燥地」*International Symposium on African Kingdoms with Professor Emanuel Terray*. 2008年2月27日，名古屋大学

SHIMADA, Yoshihito "Reconsidering Animal Power as the Basis of Afro-Eurasian Dryland Civilization", *9th International Conference on the Development of Drylands*. 7-10 Nov. 2008, Alexandria, Egypt.

SHIMADA, Yoshihito "Jihad peul et la civilisation de la région intérieure sèche du Continent Afro-Eurasien" *40 ans de recherche japonaise au Nord Cameroun à la mémoire d'Eldridge Mohammadou et P. K. Eguchi*. 29 November 2008, Muna Hall, Yaoundé, Cameroon.

鷹木恵子 「マイクロクレジットと女性の経済活動」『中東の新しい経済』国際交流基金，2007年6月14日，ジャパンファウンデーション国際会議場
今村薫 「狩猟採集民の心」『京都シニア大学主催』2007年7月10日，京都商工会議所

縄田浩志 「写真〈ハゲワシと少女〉の最も近くにいた日本人：日本の教育現場でアフリカの飢餓・内戦を

考える実践的研究：』『日本文化人類学会第41回研究大会』2007.6.2, 名古屋大学

縄田浩志「写真〈ハゲワシと少女〉の最も近くにいた日本人」『日本アフリカ学会第44回学術大会』2007.5.26, 長崎大学

縄田浩志「スーダンの飢餓・内戦への眼差し」『日本中東学会第23回年次大会研究発表』2007.5.13, 東北大学

縄田浩志「少女の瞳と少年のおちんちん—異文化ショックから文化人類学へ—」『日本ナイル・エチオピア学会第16回学術大会』2007年4月14日～15日, 慶應義塾大学SFC

NAWATA, Hiroshi “Mangroves as Fish Nursery and Forage Safekeeping in Coastal Zones of the Arid Tropics”, *9th International Conference on the Development of Drylands*. 7-10 Nov. 2008, Alexandria, Egypt.

〔図書〕(計11件)

嶋田義仁編 2006『アフリカ伝統王国の不平等階層性と多部族的・超部族的の地域形成をめぐる理論的研究』アフリカ伝統王国研究III 360頁

日野俊也著, 嶋田義仁・中村亮編 2007『スワヒリ社会研究』イスラーム圏アフリカ論集I、507頁

嶋田義仁 2008『レイ・ブーバ王国の研究：牧畜民フルベ族によるアフリカ超部族イスラーム世界の構築』イスラーム圏アフリカ論集III、279頁

嶋田義仁編 2008『アフリカ・イスラーム圏における白色系民族と黒色系民族の紛争と共存の宗教人類学研究』イスラーム圏アフリカ論集IV、184頁

嶋田義仁編 2008『伝統知識の再活性化によるアフリカ草の根開発(Grass Root Development)と環境保護』139頁

砂野幸稔 2007『ポストコロニアル国家と言語—フランス語公用語国セネガルの言語と社会』412頁

鷹木恵子 2006『中東イスラーム諸国におけるマイクロクレジットとジェンダー開発に関する人類学的研究』202頁

鷹木恵子 2007『マイクロクレジットの文化人類学—中東・北アフリカにおける金融の民主化にむけて』418頁

鷹木恵子訳(デイリー・ハリス, S. 著) 2008『マイクロクレジットの現状：サミット報告2006』115頁

Djingui MAHMOUDOU, ed by SHIMADA, Y oshihito ed. *Le Pouvoir, Le Savoir et la Richesse: Les Fulbe Ngaundere face au processus de modernization* (イスラーム圏アフリカ論II), pp. 317+vii.

NAWATA, Hiroshi 2008 *A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems* 104.

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://islamken.net/islam/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

嶋田義仁(名古屋大学・大学院文学研究科・教授)
研究者番号：20170954

(2) 研究分担者

・砂野幸稔(熊本県立大学・文学部・教授)

研究者番号：60187797

・鷹木恵子(桜美林大学・国際学部・教授)

研究者番号：60211330

・今村薫(名古屋学院大学・経済学部・教授)

研究者番号：40288444

・菊池滋夫(明星大学・人文学部・助教授)

研究者番号：60290988

・縄田浩志(総合地球環境学研究所・研究部・准教授)

研究者番号：30397848

(3) 連携研究者

()

研究者番号：